

スムーズに就農支援

3町村と連携、一貫対応

千葉・JA長生

千葉県のJA長生が管内の一宮町、長生村、白子町の3町村と県長生農業事務所と共に立ち上げた「長生農業独立支援センター」の利用が増えている。JAが栽培技術や販路確保、研修先の調整を担い、行政は農地や定住先の紹介など、各組織が役割を發揮しワンストップで相談に対応。就農希望者の不安を解消し、スムーズな独立就農を後押しする。

定住増え空き家対策にも



新規就農した都築さん④のイチゴ農園を訪ねる内山センター長③と渡邊課長(千葉県長生村で)

センターは2019年6月に開設。JA本所内に事務所を置き、

「長生農業独立支援センター協議会」が運営する。広域の行政が運営費を拠出する支援センターは全国的に珍しい。開設以降、9人が新規就農を果たし、うち8人は管内に定住。農家以外の出身者が大半で県外からの移住も多い。現在は3人が研修中だ。

「地域で長く活躍できる農家の育成」(内山孝夫センター長)を掲げ、幅広い支援メニューを用意。セミナー

や個別相談会の他、管内で栽培が盛んな梨やトマト、長ネギの生産者を見学するバスツアーや2泊3日の農業体験研修を実施し、就農者のミスマッチを減らすよう工夫する。22年度は100人近くが相談に訪れている。栽培品目が決まった人は、JAの部会を通じて1、2年間の研修

を行う。並行して行政が農地や住居の情報を提供。就農後もJAや県長生農業事務所の職員が月2回以上は訪問し、栽培指導や悩み相談に応じる。

協議会の会長を務める長生村の小高陽一村長は「複数の行政が連携することで、就農者は選択肢が広がる。管内への移住・定住が増えれば、空き家対策にも役立つ」と期待する。

運営を手伝うJA担い手支援課の渡邊和洋課長は「協議会による事前研修で就農前から部会と良好な関係が築け、販路や相談体制が整い、スムーズな就農

活動が行える」と強調する。

センターで約1年6カ月の研修後、22年9月に長生村でイチゴ農園を始めた都築ゆかりさん。連棟ハウス2棟(約14坪)で「紅ほっぺ」や「かおり野」など4品種を8800本育て、直売やJA直売所「ながいき市場」で販売する。

都築さんは「農地や中古ハウスを紹介してもらい、初期費用を抑えられた」と感謝。観光農園の運営も視野に入れ、「管内で生産者を増やし、地域ブランドを自指したい」と意気込む。